



7月おいで盆すぎて
市川の花火の場所であいやしょ

(愛・会い)



人々の想いを込めて、夜空に花開く神明の花火

8月7日、毎年恒例となった「神明の花火」は、山梨県下随一の規模を誇る伝統の夏祭り。

この花火大会が、多くの人に愛され、受け継がれてきたのも、市川大門地区の花火づくりと和紙産業の発展があったからこそ。

「神明の花火」は、この町の歴史そのものであり、今もなお花火師たちの情熱と、誇りに支えられながら新たな歴史を刻み始めています。

息づく伝統の技と心意気

毎年8月7日の花火の日に行われる

「神明の花火大会」。20万人を超える観客でにぎわう、山梨県下随一の花火大会です。その歴史は古く、武田氏の時代の狼煙の打ち上げがルーツといわれています。

江戸時代、花火は庶民の夏の娯楽として打ち上げられ、甲斐の市川は常陸の水戸（茨城）、三河の吉田（愛知）とともに日

本三大花火のひとつとして隆盛を誇りました。明治時代には専門業者での生産が開始され、当時山梨県下の花火師の約半数が市川にいたといわれています。

市川の花火の生産は、千年の歴史を誇る市川和紙の技術と経済力を基盤に発展してきました。神明の名もここに由来しています。

元禄、享保の時代に、市川の製紙に功績のあった甚左衛門の命日である7月20

日を紙の神を祀る「神明社」の祭礼日と

して祝い、盛大に花火を打ち上げるようになったのがはじまりといわれています。当時の里謡にも「7月おいで盆すぎで 市川の花火の場所であいやしよ」と唄われ、広く人々に親しまれてきました。

以来、市川三郷の地で花火づくりの技術、そして心意気が受け継がれ、平成元年、神明の花火大会が蘇りました。

Shinmei Fireworks

Colorfully spreading into a night sky together with many wishes.

On Aug 7, the magnificent festival of “Shinmei Fireworks,” that is a traditional summer festival and the largest in the Yamanashi prefecture, will be held every year. The reason for that this firework festival was loved and supported by many people is closely related to the development of firework industries and Japanese Washi paper production being succeeded here in Ichikawadaimon area. “Shinmei Fireworks” is almost a part of the town history, and will continue with the prides and passions of the local pyrotechnicians.



QRコードをスキャンすると
パノラマVRが楽しめます





株式会社マルゴ

一発にかける 職人の熱き想い

地道な仕事が生み出す美しさ

「同時にこれだけ多くの人に、遠く離れた人にまで見てもらえて、一瞬で何十万人の人を魅了してしまうのは花火だけです。ほかにはない仕事だと思っています」

市川三郷町で戦後まもなくから続く煙火店「マルゴ」の四代目齊木智徳さんの言葉に、花火師としての誇りを感じます。

真夏の夜空を華やかに彩る花火の製造は、秋を迎えるとともに始まり、翌年の夏まで地道な作業が続きます。

「星かけ」と呼ばれる発色する火薬の塊を造る作業は、一日かけて2mm程度ずつ粒を大きくしながら数センチまでにするという根気のいるもの。「夜空に上がった花火は

火師競技会など数々の大会で優勝に輝くなど、鮮やかさとエンターテインメント性の高い演出力で世界から注目されています。

花火師は若い世代からベテランまで幅広く、一発一発がまさに職人それぞれの技と想いの集大成。「伝統と新しいものを開発する努力、このふたつがマルゴの花火をつくりだしています」と自信を見せます。

毎年、全国各地のさまざまな大会を手掛けていますが、中でも神明の花火は特別なもの。「持っている技術とパフォーマンスの一番を見せるのが神明の花火です。地元の人々の協力と理解があつてこそできる大会であり、地元の人に一番のファンになつてもらえるように、毎年思いを込めて打ち上げています」

神明の花火には、ふるさと市川三郷町を想う熱い気持ちもしっかりと込められています。

職人の技と想いの集大成

「マルゴ」の花火は世界花



「マルゴ」の四代目齊木智徳さん

玉込め(上)と玉張り(下)

花火職人の高度な技で星を詰めていく

星かけと乾燥を繰り返し、2〜3ヶ月間星を育てる

花火の花びらとなる星を作る「星かけ」



日本一の花火を見せたい

「神明の花火には強い思い入れがあります。この日を楽しみにしてくれている人が本当にたくさんいますから。その年の一番を見せる大会でもあり、気合が入ります」

明治34年に創業し、隅田川の両国花火大会をはじめ数々の大会で輝かしい成果をあげてきている「齊木煙火本店」の四代目齊木克司さんも、毎年特別な思いを持って神明の花火大会に臨んでいます。

齊木煙火本店とマルゴ

が毎年交互に仕切っていますが、「それぞれの個性が色濃く出る大会で、まさに日本一の花火を見せる場。市川三郷町の名を、甲州の名

を背負っているという自負があります」と胸を張ります。

さらなる極みを 目指して

花火づくりは、作業の二つが真剣勝負。火薬の塊である星を紙製の半球に詰める「玉込め」では、詰めが1mmずれると、空で10mものずれになります。「気が休まるところは一切あ

市川三郷の名を背負い 空高く打ち上げる

りません。すべての過程が難しく、だからこそ面白く、楽しくもあります」。まさに職人の技と想いの結晶です。

花火は昔から色と音と形がベースになっていることは変わりませんが、一発一発の奥深さと豪華さは増すばかり。

株式会社 齊木煙火本店

「そのバリエーションの広がりには驚くほどで

す。つくることにおいても、魅せることにおいても、とても深い世界になっています」

もつと美しいもの、もつと観衆を魅了するものをつくりだしたいという、さらなる極みを目指す姿がそこにあります。

「多くの人に喜びと感動を与えられるのが花火です。これからもたくさんの人々に喜びを与え続け、市川三郷の名をとどろかせていきたいと思っています」

多くの花火師、そして地域の人々の想いを込めた市川三郷町自慢の花火は、これからも多くの人々を魅了し続けることでしょう。



「齊木煙火本店」四代目齊木克司さん

夜空に咲く大輪の花



学生ボランティアも活躍(上)、盛り上がる会場(下)



重機を使用して二尺玉を設営



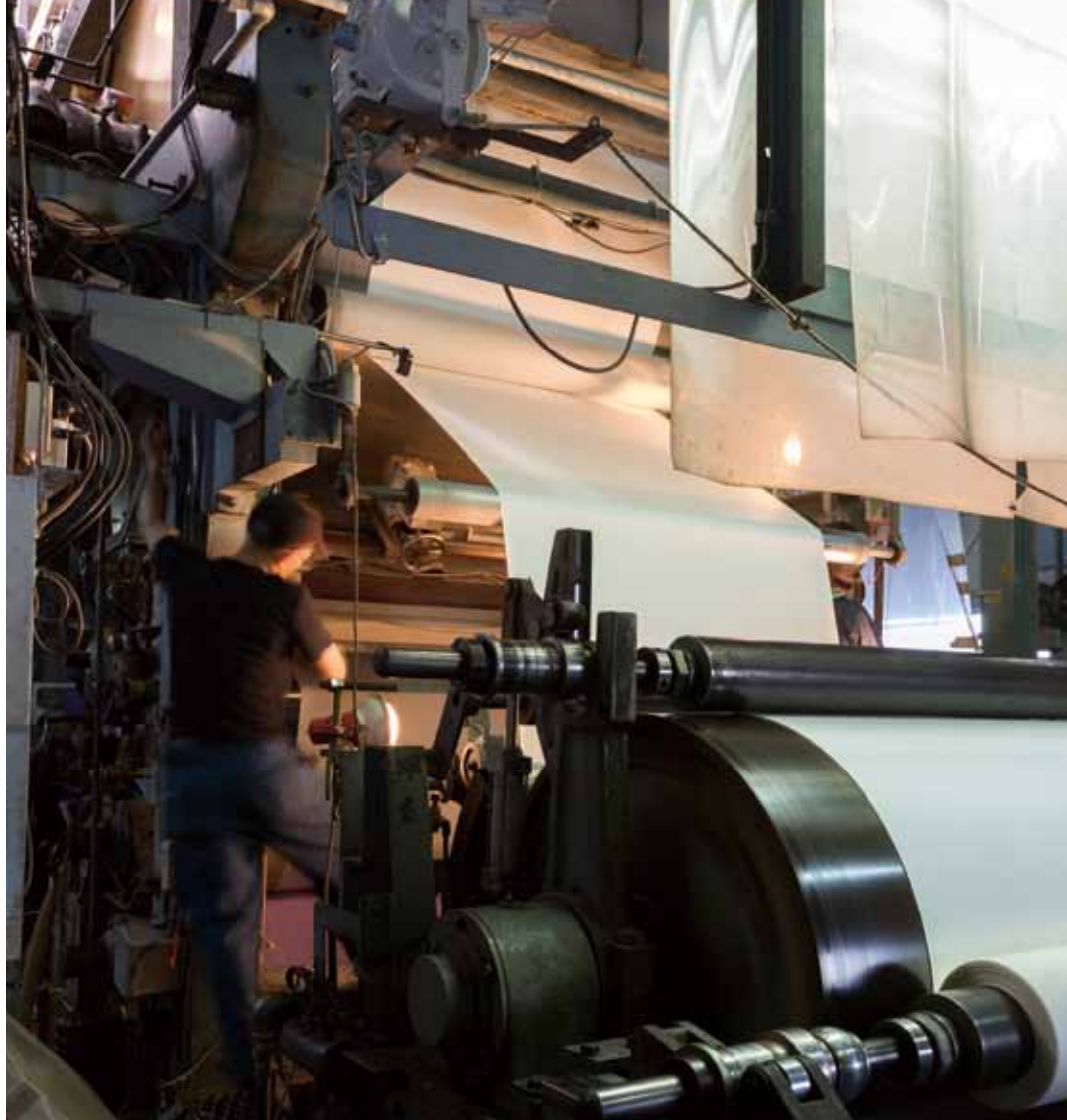
星を包む玉皮(上)、大会前のセッティング(下)





次代を見つめる伝統産業

伝統や文化と融合しながら地域に根付き、大切に受け継がれ発展してきた市川三郷町の伝統産業。その魅力をあらためて見つめ直し、さらに磨きをかけ、次代につないでいこうと、新たな二歩を踏み出しています。



驚くほどのスピードで和紙が出来上がっていく

千年の歴史を継ぐ 市川和紙

職人たちが受け継いできた伝統の技と心意気により、千年もの歴史を積み重ねてきた「市川和紙」。

手漉き和紙から始まり、

多種多様に変化を遂げながら市川三郷町の一大産業として発展し、今も日本の和紙文化を支えています。

伝統の市川和紙はこれからも、和紙ならではのぬくもりや優しさとともに、その技を継いでいきます。

千年の歴史を誇る 市川和紙

障子紙の生産は全国一

市川大門は千年の歴史を持つ和紙の伝統と製紙産業を基盤に発展を遂げてきました。平塩の岡にあった白雲寺の旧記には「平塩に九戸、弓削に七戸の紙漉きあり」と記され、また甲斐源氏の祖・源義清が市

川へ製紙技術に熟練した甚左衛門を伴い、優れた技術を伝授したともいわれています。

武田氏の時代は市川の和紙は御用紙として用いられ、人の肌のように美しいことから「肌吉紙」と呼ばれ、職人は肌吉衆として諸役を免除されるなど手厚く保護されました。

徳川の時代になっても御用紙の献上は続けられ、隆盛を極めた市川御用紙漉き



必要な寸法に断裁



紙の強度を出すために、ピーターで叩解(こうかい)し、洗浄する



包装して商品が完成する



ロール状の和紙を平判にカットする



ヤンキー式抄紙(しょうし)機で紙を抄く

地場産業の核を成す製紙 新たな時代をめざして

ですが、明治維新をむかえると一般売紙濃きと同地位になり、明治の中頃からは洋紙も登場してきました。

いくつもの大きな波を乗り越えながら、市川和紙は家内工業的からやがて近代的な製紙産業となり、多様な商品が開発されました。昭和30年代には機械抄きも導入され、障子紙やお札、包材やパッケージなど多種多様な紙を生産。なかでも障子紙は全国一の産地となり、現在も生産量日本一を誇ります。

市川三郷町内には現在、7軒の機械抄き工場と1軒の手漉き工房があります。機械抄き工場のひとつ、山一和紙工業は昭和31年に設立され、市川の製紙産業を盛り立てています。

工場では大きな抄紙機が絶えず動き、1分間に15〜50mという速さで抄き上げられた和紙が次々とロール状に巻かれていきます。原料の配合具合などで和紙の質感や風合い、柔らかさなどが異なり、同社では障子紙だけでも数十種類を製造しています。

また和紙づくりは製造する和紙の200〜300倍の水を必要とします。市川には昔から紙づくりに適した富士山の伏流水が豊富にあり、山一和紙工業でも昔から敷地内3カ

所のポンプで汲み上げた伏流水を使っています。

同社では障子紙や、ご祝儀袋などに使われる奉書紙などを主に製造し、新商品の開発にも積極的に取り組んでいます。

「伝統の和紙づくりをさらに発展させていくためには、新たな製品の企画、提案が不可欠です」と話すのは四代目となる専務・今村泰裕さん。これまでも光触媒で臭いを分解する機能紙や、バナナの繊維を使ったスピーカー用のコーン紙を開発するなど、新分野の開拓を進めています。

現在も市川三郷町では製紙産業に関わる人はとても多く、まさに地場産業の核を成すもの。「だからこそ、地域全体でこの伝統をつなぎ、進化させていかなければならない」と言います。

今後は同じ地場産業であるハンコや農産物などとの連携にも取り組みながら、町全体をもっと元気にしていきたいと考えている今村さん。その目はしっかりと次代を見つめています。



山一和紙工業の四代目となる専務・今村泰裕さん



漉し残った紙の素を1枚ずつ丁寧に重ねていく



乾燥機に貼り付けて乾燥させる



簀桁(すげた)を用いて紙を漉きあげる

伝統を継ぐ手漉き和紙 一枚一枚に想いを込めて

町内で唯一手漉き和紙を製造している豊川秀雄さんは、この手漉き工房の六代目。千年続く伝統の技法で和紙を漉いています。

年代物の釜や漉き舟などが並ぶ工房から、楮や三桧などの原料を煮てはぐした繊維と練りと呼ばれる粘液を混ぜた溶液を、簀桁で汲み上げる独特の音が聞こえてきます。凜とした緊張感に包まれながら、汲み上げては揺り動かし、繊維を絡め合わせ、漉き上げていく作業が続きます。

「二十歳から父に学び、一人前になるには朝から晩まで漉いて数年かかりました。技法はその頃学んだものと変わっていません。すべて体が覚えています」としやかな動きで次々と漉いていきます。

漉き上げた紙は重ねて脱水した後、一枚ずつ丁寧に重ね、鉄板乾燥機に貼り付けて乾燥させます。多い日には一日400枚を漉きますが、すべて風合いが異なり、それぞれに趣があります。「どこかで手を抜くと紙に出てきますから、一枚一枚使う人のことを考えて漉いています」。そんな職人の想いが感じられるのも手漉きならではの魅力です。



ブドウのツルや地元名産のニンジンやトウモロコシの繊維を入れ込んだ和紙

Ichikawa Washi

Being succeeded over a thousand years history.

“Ichikawa Washi” is a traditional Japanese paper and its traditional style has been handed over for a thousand years by the craftsmen’s spirits and techniques. Originating from a handmade Japanese paper production and many variations were diversified through the time, this paper production developed as one of major industry in Ichikawamisato town and plays an important role in Japanese Washi paper culture. From now on, our traditional Ichikawa Washi will continue over the generations with its warmth and gentleness nature.

市川三郷町では毎年、小学6年生が卒業証書を自らの手で漉いていて、豊川さんが伝統の特技を見せながら直接指導しています。またブドウのツルや地元名産のニンジンやトウモロコシの繊維を入れ込んだ和紙を開発するなど、和紙の魅力を広める取り組みにも積極的です。

手漉き工房の六代目、豊川秀雄さんは「やまなしの名工」や「町の無形文化財」に選ばれている



ハンコの 里に息づく匠の技



台木をテコとして起底刀で彫る粗彫（あらぼり）、失敗が許されないため緊張の時間が続く



数種類の印刀を使い分け、彫り上げる



文字のアレンジも芸術性や新しさを追求

日本一の「ハンコの里」として知られる六郷地区。
この地で明治期から職人たちによって受け継がれてきた甲州手彫印章は、
未来に継承していくべき伝統文化として、そして地域を支える地場産業として、
その芸術性や独自性を追求しながら進化を図ろうとしています。

職人の個性が光る芸術品

巨大なハンコのモニュメントが迎ええてくれる甲斐岩間駅。そこからはど近い住宅街に、ハンコ職人望月煌雅さんの工房があります。分厚い専門書や字典がずらりと並びその工房で、起底刀^{きていとう}という手彫り専用の道具を使って「文字」「文字」丁寧に彫り上げていく伝統の技は、頑なに受け継がれていました。

お祖父さんやお父さんがハンコを彫る姿を見ながら育ったという望月さん。大学時代に師匠となるはずだったお父さんが他界しましたが、自ら選んでハンコの道へ。「この町で印章彫刻技能士の息子として育つ中で、歴史ある地場の産業を守り、受け継いでいかなければという思いが自然と生まれました」と振り返ります。

職人の完全なる手作業によって生み出される甲州手彫印章は、職人それぞれの個性が光るまさに芸術品。「同じ書体でも職人が違えば雰囲気も味わいも違いま

す。一つとして同じものはありません」。そんなただつのハンコを求めて工房を訪れる人も少なくありません。

新たな製品で 進化をめざす

安価な機械彫り製品との価格競争や社会の電子化など、手彫印章を取り巻く環境は時代とともに大きく変わってきていますが、望月さんは手彫印章ならではの芸術性や独自性を打ち出した新たな製品づくりに取り組み、印章産業の進化を図ろうと動いています。

名刺に押すのにびつたりな小さなサイズの名刺印はそのひとつ。機械刷りの文字が並ぶ名刺に手彫りの味わいある印を押すだけで、名刺の印象はあたたかみあるものになり変わります。まさに手彫りなら

ではの奥深さを感じさせてくれる印です。

またデザイナーやほかの伝統工芸などのコラボレーション商品の企画にも積極的に取り組んでいます。「異なる分野とのコラボレーションは、自分では考えつかないようなおもしろい商品が生まれる可能性があります。ります。新たな商品の開発をハンコ業界全体の活性化につなげていきたいです」。その頭の中には、新しい企画が次々と浮かんできているようです。

印章業の 活性化をめざして

ほかにも六郷のハンコの素晴らしさを地元をはじめ、もっと多くの人に知ってもらう取り組みとして、六郷印章業連合組合による篆刻体験教室での指導や、町内外での実演にも積極的に参加。小学生の見学

に自らの工房を開放したり、

競技会にも毎年出品して最高賞を何度も受賞するなど、六郷の印章業の活性化をめざして多方面で活躍しています。

「さまざまな活動を通して、多くの方にハンコに興味を持っていただき、さらには作り手の増加にもつながってきたいと思っています。現状を維持するだけでは何も変わりません。新たな取り組みを仕掛けながら、地域全体を盛り上げていきたいです」

その言葉からは、甲州手彫印章のこれからを担っていく若手職人の想いが伝わってきました。



望月さんが最も時間をかける作業、字入（じいれ）



職人たちの努力で伝承されていく技は町の財産



望月 煌雅さん

日本一のハンコの町である、六郷町（現 山梨県市川三郷町）生まれ。神奈川県印章職業訓練校卒業後、二葉一成先生に師事。

- 厚生労働省認定
一級印章彫刻技能士（グランプリで優勝）
- 経済産業大臣指定 伝統的工芸品
甲州手彫印章 伝統工芸士
- 厚生労働省 ものづくりマイスター

Carved Stamp Seal

Experienced craftsman techniques
in the stamp seal country

Rokugo area is well known as the stamp seal country and this area produces the largest number of the stamp seals in Japan. “Koshu Hand Carved Stamp Seals,” are the state of artworks produced by the local experienced workers. The stamp seal production, which was handled by the special craftsmen in this area since Meiji era, is evolving in pursuit of originality and artistry as a traditional cultural asset to be succeeded toward the future and a precious local industry supporting the area development.



名刺印が入るだけでオリジナリティが増し
印象に残る名刺に



山里の厳しい風土と ものづくりの伝統から生まれた 「甲州手彫印章」

富士川流域の峡南の地は耕作地が少なく、農業には不向きな風土でした。六郷地区もそんな町のひとつで、古くから岩間を中心に足袋づくりが行われ、それを全国に売り歩く行商が盛んでした。

一方、山梨県下では江戸時代中期あたりから名産の水晶彫刻や研磨産業が発達し、明治になるころから水晶を使った印章の生産も始まりました。

近代化が進むにつれて印鑑の需要も一気に拡大。六郷の地にも印刻技術が積極的に導入され、ものづくりの伝統と強力な販売ルートを背景に発展していきました。

昭和の初期には六郷は印章、ハンコづくりの一大産地にまで成長。印刻の工房のほか印材問屋やケース製作業者、販売業者などが集約し、現在も全国の生産量の50%、県内の70%を占める日本一の「ハンコの里」として知られています。

世界に7部しか現存しない 「十鐘山房印拵」

そんな「ハンコの里」である六郷には、職人たちにはもちろん、地域の人々に大切にされている、この町ならではの宝があります。2000年から2500年前の中国の著名な印を集めた30巻191冊にも及ぶ印譜集「十鐘山房印拵」です。
清時代に中国人コレクター陳介祺（ちんかいき）により



印章資料館に展示される貴重な資料

り10部が作成されたもので、現存する7部の印譜集はそれぞれ異なった製本となっていて、貴重な美術品です。

市川三郷町には、日本芸術院会員の故小林斗盞氏（とせん）より1999年に譲られました。7部のうちの1部は、東京国立博物館にも寄贈されています。



龍音元王



平陰郡司徒



年昌之印



弘隆子則頼

市川三郷町にある印章資料館では、この貴重な「十鐘山房印拵」を常設展示しています。また30巻191冊をデジタル化して、すべての印譜を見ることが可能です。2000年前の印譜の形やその色彩は感動するほど。ハンコの里のルーツを感じることができます。



印章資料館では、十鐘山房印拵閲覧システムで古銅印譜を検索することができる

十鐘山房印拵は陳介祺が収集した最大無比の古銅印譜

十鐘山房印拵